

学会ハイライト

第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会 をふりかえって

(平成28年11月19日(土)，20日(日)，米子コンベンションセンター)

山元 修

鳥取大学医学部感覚運動医学講座皮膚病態学分野 教授/学術大会会長

はじめに

平成28年11月19～20日に，鳥取大学皮膚科主催(図1)で鳥取県米子市の米子コンベンションセンターにて，第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催させていただきました。米子市は山陰地方のほぼ中央にあるものの，極めて交通の便が悪く，また11月は山陰特有の悪天候が続くこともあり，参加者は少ないと予想しておりましたが，幸い天候にも恵まれ，全国各地より787名の参加者を得て盛会のうちに2日間を終了しました。ご参加いただいた皆様をはじめ，講演やシンポジウム

の講師，企画演題や一般演題の発表者，座長，西部支部運営委員会や代議員，運営事務局，鳥取大学皮膚科ならびに産業医科大学皮膚科同門会，以上の皆様方のご協力に対し大会会長として誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

かたちにこだわる

本学術大会のテーマは「かたちにこだわる」でした。「かたち」というと，まずは皮膚科学の根幹をなす肉眼臨床，皮膚病理組織学，ダーモスコピーを連想される方が多いと思いますが，そのみならずシステムや様式，スタイルといった意味も込



図1 会長(中央)，事務局長(会長の右隣)と学会運営スタッフ。



図2 大会ロゴマーク。

めました。形態学はもちろん、皮膚の免疫システム、治療の最新のかたち、代表的皮膚疾患の病態様式、在宅医療のあり方などについても“かたち”という言葉が当てはまります。今回はこの“かたち”にとことんこだわって企画案を考えました。なお、大会のロゴマークも、会長自らが鳥取県の名峰大山、顕微鏡、松葉ガニをあしらって“かたち”にこだわってデザインしました(図2)。

依頼講演

招待講演では、私のお師匠様であるBoston大学のJag Bhawan教授(図3)に「皮膚疾患の診断における臨床病理相関の役割」をテーマに、多数の興味深い例を提示していただき、病理組織だけでは診断に迷う場合、臨床医との対話を通して臨床像に立ち返ることが重要であることをお話いただきました。講演中CPCという言葉が頻繁に出て参りましたが、通常われわれが使うCPC(臨床病理コンファレンス)ではなくclinicopathological correlationの略語で、眼から鱗でした。国際交流講演として韓国の友人であるSungkyunkwan大学Samsung Medical CenterのDong-Youn Lee教授に「爪部のメラノーマ」についてご講演いただきました。爪部メラノーマは早期臨床像がつかみにくい、診断に必要な大きさの生検が取りにくい、生検像の解釈がむずかしいことから早期診断がむずかしいのですが、いかにそれを避けるかについて、最

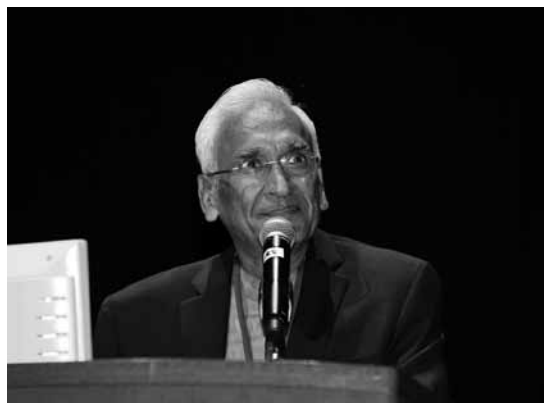


図3 招待講演でのJag Bhawan教授(Boston大学)。

新の知見も交えてお話いただきました。

特別講演では、久留米大学解剖学の中村圭一郎教授に、新機軸走査型電子顕微鏡であるFIB/SEMについて最新の話題をご提供いただきました。走査電顕でありながら透過電顕と同じ切片画像を観察できると同時に、試料の超薄精密切削が可能で、切削と撮影を繰り返して1,000枚ほどの連続画像を再構築して得られる三次元超微構造は、線維芽細胞がマクロファージをしっかりと抱え込む像をはじめ、圧巻の美しさと精密さを兼ね備えており、聴衆を魅了しておりました。

教育講演は3演題を用意しました。まず、鳥取大学器官病理学の梅北善久教授に皮膚科医にはなじみの薄い乳癌の病理についてご講演をお願いしましたが、われわれもしばしば転移性皮膚癌として遭遇する機会もあり、非常に役に立つ内容でした。また産業医科大学第1病理学の久岡正典教授には、これもまた皮膚科医には難解な部類に入る軟部肉腫の病理について講演を賜りましたが、この分野では本邦でトップの先生ですので、極めてわかりやすく最新の知見をお話いただきました。さらに、在宅癌診療のパイオニアとして有名な野の花診療所の徳永進先生には、在宅医療にはさまざまな“かたち”がある、すなわち不定形であるということ、事例を交えながら教えていただき、また在宅医療を始めるにあたり重要なことは「本人の決意」「家族の決心」「看護師の本気と医師の覚悟」

「さまざまな人との連携」であることを強調されていました。

シンポジウムと特別企画

シンポジウムは2つ設けました。まず、「アレルギー・免疫/最新のかたち」というセッションでは、5名の著名な研究者に皮膚の免疫・アレルギーと形態学の融合を中心にしたお話を座長の森田栄伸教授(鳥根大学)に企画していただきました。京都大学の梶島健治教授には二光子励起顕微鏡システムを用いた各種疾患モデルのクリアカットな生体イメージングをお示しいただき、免疫細胞の動態をリアルタイムでみせていただきました。大阪大学生命機能研究科細胞内膜動態研究室の吉森保教授には、2016年、大隅教授のノーベル生理学賞受賞でも話題になったオートファジーの機能についてこれまで蓄積されてきた膨大な知見をもとにわかりやすく解説していただきました。岡崎統合バイオサイエンスセンターの富永真琴教授は、皮膚の感覚神経終末での活動電位発生にTRP(transient receptor potential)イオンチャネルが中心的役割を果たし、温度感受性TRPチャネルが皮膚の痒みと痛みの刺激感知に関与することを示されました。鳥根大学の森田栄伸教授は、乾癬角層から抗白癬菌ペプチドを分離し、それがpsoriasin(S100A7)であり、その還元型に抗真菌作用があることを証明され、作用機序についても言及されました。慶應義塾大学の天谷雅行教授には、皮膚のバリア機能に必須であるタイトジャンクションの恒常性について、Kelvinの扁平な14面体(Kelvin's flat tetrakaidecahedron)の概念を用いた“かたち”にこだわった解析を披露していただきました。

もう1つのシンポジウム「皮膚病理/若手が語る最新のかたち」のシンポジストに、会長と座長の安齋眞一教授(日本医科大学武蔵小杉病院)により日本の皮膚病理の将来を背負って立つ若手集団である「草志衆」から5名の先生が指名されました。京都府立医科大学の浅井純先生には皮膚の肉芽腫の病理組織と発症機序についての最新の知見を、

兵庫県立がんセンターの高井利浩先生には一般にはなじみの薄い有棘細胞癌の病理像の垂型分類について、慶應義塾大学の種瀬啓士先生には皮膚腫瘍におけるシグナル伝達経路の病態への関与について、一部の腫瘍のかたちとの関連も交えて、また鳥取大学の柳原茂人先生には電子顕微鏡でみた表皮真皮境界部病変パターンをとる疾患における基底細胞の空胞変性の形態形成過程について、最後に日本医科大学の高山良子先生には、最近お目にかかる機会が増えてきたIgG4関連疾患の皮膚病変の病理組織について、新進気鋭らしく若々しさに溢れた講演をしていただきました。

特別企画としてダーモスコピーならびにCPCセッションの2本立ての「かたち競演会」を設け、すべての西部支部所属大学にご参加いただきました。それぞれ10校ずつが厳選された演題を出されました。オーガナイザーの田中勝教授(東京女子医科大学東医療センター)と安齋眞一教授には、楽しくかつ盛り上がるような企画をお願いしており、見事期待に答えていただきました。また、バーチャルスライド化された病理組織標本やダーモスコピー画像をあらかじめ各大学に閲覧していただき、他大学の症例の診断を回答してもらったうえで、オーガナイザーの意見も加味しながら採点して上位者を表彰するというイベントも設けました(図4)。受賞者は下記のとおりです。

・「皆で楽しむダーモスコピー/かたちコンファレンス」

金賞 山口 卓 先生(産業医科大学)

銀賞 古賀文二 先生(福岡大学)

銅賞 米倉直美 先生(佐賀大学)

・CPC「かたちにこだわる病理コンファレンス」

金賞 森上純子 先生(香川大学)

銀賞 広瀬憲志 先生(徳島大学)

銅賞 酒井貴史 先生(大分大学)

持田耕介 先生(宮崎大学)

特別賞 森 裕美 先生(鳥取大学)



図4 かたち競演会のうち「かたちにこだわる病理コンファレンス」の表彰式。発表者、座長、オーガナイザー全員集合。

一般演題

西日本を中心に139題の一般演題をいただきました。各演題ともポスターおよび口演の2本立てでしたが、ポスターに関してはポスター会場が懇親会会場に直に隣接しており、懇親会のときに開放して食事をしながら討論をできるようにいたしました。どれも各施設よりの選りすぐりの演題でしたが、その中でもとくに優れた演者に与えられるポスター賞の受賞者については以下のとおりです(それぞれ五十音順)。

- 金賞 堤 玲子 先生(鳥取大学)
- 山本絢乃 先生(岡山大学)
- 銀賞 阿南 隆 先生(札幌皮膚病理診断科)
- 和田尚子 先生(九州大学)
- 銅賞 戸田さゆり 先生(広島大学)
- 西原克彦 先生(愛媛大学)

スポンサードセミナー

ランチョンセミナー、イブニングセミナー、モーニングセミナー、スイーツセミナー、漢方セミナーの計18セミナーを設けました。このうち1日目のイブニングセミナーはとくに共催企業に「かたちにこだわる」という趣旨をご理解いただいたうえ

で、講演の半分は会長指名の8名の先生に形態学を中心としたお話を賜りました。この点でユニークだったと思います。共催いただいた各企業の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

事後配信によるe-learning

平成28年2月に開催された第79回日本皮膚科学会東京支部・東部支部合同学術大会では、聴きたい講演が時間的に重なってやむをえず一方の聴講を断念した、という参加者への便宜をはかり、会長のお一人坪井良治教授の発案で各会場の発表を撮影して大会後にe-learning用に動画配信したと聞いておりました。われわれの学術大会でもそれを見習って、メイン会場のA会場、および「かたち競演会」や一部の教育講演の行われたB会場での講演について事後配信いたしました。今回は2会場に限りましたが、参加者には大きな価値があったと思いますし、教室員からもe-learningで勉強になったと聞いており、今後もこのような試みが浸透していくものと思われます。

支部企画研修講習会

日本皮膚科学会事務局より事前に、従来学術大会の前日に開催されてきた支部企画研修講習会を

会期中にしてほしい、という要望がありました。交通の便から大会を2日目のお昼で終了させることを計画していたため、やむをえず初日の午前中に講習会を設けました。メイン会場の聴講が少ないことを危惧したのですが、幸いさしたる影響はありませんでした。講習会は「皮膚病理道場2016 in 米子」と銘打って、佐賀市の三砂範幸先生と埼玉医科大学国際医療センター病理診断科の新井栄一教授に、日本皮膚科学会学術大会の皮膚病理教育講演で行われているのとまったく同じ形式で、専門医に必須の病理の知識について、座学と実習という従来の研修講習会にはなかった“かたち”で解説をしていただきました。土曜日の早い時間にもかかわらず、多数の若い皮膚科医が集まり熱心に取り組んでいました。

苦労話

本原稿依頼については、苦労話や笑い話も交えてください、とのことでしたが、終わってみてものすごく苦労したという実感はありませんでした。もちろん、経済的状況が悪化する中資金面で大きな不安を抱えていましたが、各方面からのご援助や共催により乗り切ることができました。懇親会で山陰の山海の珍味を出す予定にはしていました

が、実際海が荒れてしまうと新鮮な松葉ガニやノドグロといったメイン食材が手に入らないため、大変不安でした。しかし、幸い天候も良く取り越し苦労に終わりました。そして何より運営面で非常に不安に思っていたところを、準備から当日の運営まですべて円滑にこなしてくださった日本皮膚科学会の総会・学術大会チームの山田紀子様はじめスタッフの皆様のお陰で、不安は完全に払拭されました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

おわりに

本学術大会では一貫して“かたち”にこだわったため、見ようによっては非常に偏ったものだったかも知れませんが、教育プログラムが中心の日本皮膚科学会学術大会とは異なり、支部開催の学術大会でしかできない企画があってもよいのでは、という考えをお汲み取りいただいたうえで、本大会を機会にさまざまな皮膚の“かたち”について深く考えていただければたいへん嬉しく思います。また、本学術大会での知識の吸収、活発な討論と情報交換が、参加してくださった皆様の明日からの診療・学術活動に少しでも役に立ったのであれば幸いです。